



ふくら通信



こんにちは。2024年第1弾のふくら通信となります。2023年は新型コロナが5類となって、ようやく日常が戻ってきましたが、物価や原油価格の高騰、世界を見ると紛争などの問題も多く、平和を願う年越しでしたが、そう思った矢先の元日の石川県能登地震には大変衝撃を受け被災者の方を思うと胸がいっぱいです。一刻も早い救済と復旧を願います。災害はいつどこで起こるかわかりませんので、出来る備えや心構えをしておかなければと再度考えております。こんな時こそ前向きに心を奮い立たせて、弊社は理念のとおり、幸福をふくらませて世の中を良くしていけるように日常に感謝して私たちの出来る事をし、今年も利用者様の心に寄り添い、心を込めて療育や関りを通して、たくさんの経験やお子様の成長をご家族とともに見守っていきたいと思っております。ご家庭での様子や出来事など引き続きたくさんお教えてください。

今年もどうぞよろしくお願い致します。



代表コラム



「新年の始まりと災害」

株式会社福蔵FUKURA 代表取締役 須田 祥子

皆さんも元日の能登の地震の知らせにさぞや驚かれたことでしょう。その被害は日を追うごとに明らかになっており、冬の寒さに加え現地は深刻な状況となっていると思います。支援物資を輸送する飛行機の衝突事故も衝撃的でありました。ただただ被災され亡くなられた方の冥福を祈るのみです。新年早々、悲しいニュースに心が痛みますが、これから世界戦争の脅威にもさらされているという現実をしっかりと認識しながら、人々の心に平和と理解と愛と解決のための知恵が満ち溢れることを祈りながら、今自分に出来ること。小さな光かもしれませんが、世の中を照らす一本のろうそくになるための努力をしていきたいと思えます。

「第二の母とのお別れ」

私の両親は教員で当時は育休などほとんどなく、母は私を生んだ後、産後2か月で職場復帰を果たしました。2つ違いの兄は自宅で祖母に面倒を見てもらっていたのですが2人の孫の世話は出来ないということで、私は母の姉にあたる叔母の家に日中預けられることになりました。幼い私は、叔母の家にすっかりなついて朝も夜も叔母の家で寝泊まりし叔父、叔母を「お父ちゃん、お母ちゃん」と呼び、叔母夫婦も娘同様の愛情を注いで可愛がってくれました。しかし幼稚園に上がる年に、自宅に戻らなければならず、お母ちゃんは「祥子を泣き泣き家に戻したんだよ」と何年たっても何十年たっても当時を振り返っては涙ぐんでいました。

幼稚園に入るため自宅に戻ったあと、叔母はよく突然会いに来て「顔を見に来たよ。どうしてるかと思って。」と鼻を真っ赤にして泣き顔で私を抱きしめてくれました。子供の頃は泣いて泣いているのか不思議に思っていたのですが、携帯電話もない時代でしたから、顔が見たくなくて胸が押しつぶされるような気持ちだったのだろうと今になると痛いほどわかります。切ないまでの愛情をかけてくれたことに感謝しかありません。

先に亡くなった叔母の夫である叔父も私との血のつながりは無いにも関わらず、娘のように私を可愛がってくれて、結婚したのちも「娘と同じ」とずっと言い続けてくれていました。自宅に帰った子供の私は、その後母親と姑の確執のはざままで結構な苦勞をするのですが、どんな苦しい時にもお父ちゃんとお母ちゃんが愛してくれたことが、私の自信となり心の支えになっておりました。愛情に血のつながりは関係ないということを教えてくれた人たちでもあります。

そんなお母ちゃんが、クリスマスの日天に召され、31日の大晦日が告別式でした。親を看取る年齢になりましたが、生みの親、幼少時代からの第二の親を、これで4人とも見送ったわけです。いつかは訪れることですが、感染症の影響で、施設に入所していたお母ちゃんとは、この3年間ほとんど会うことができなかつたことだけが残念でなりません。最後は手を握って「大好きだよ！ありがとう」と言ってあげたいと思っていましたから。幼い私の手を引いてくれたお母ちゃんの手ぬくもりは、きっとこれからこの事業をしていく私の背中を優しく押し続けてくれると感じています。与えてもらったことに何一つお返しは出来ていませんが、ふくらの子供たちを愛することで恩返しをしていきたいと思えます。